

# 「特別の教科 道徳」の授業と評価を考える

武庫川女子大学 押谷由夫

道徳教育は、幸せな人生を送りたいとか平和で住みよい社会を創りたいといった私たちの素朴な願いを叶えるものです。その要となる指導を目指して、小学校と中学校に、新しく「特別の教科道徳」が設けられました。

## 1 「特別の教科 道徳」の基本的押さえ

「特別の教科道徳」は、「道徳的諸価値の理解」「自己を見つめる」「物事を多面的・多角的に考える」という3つの学びを重視します。「道徳的諸価値の理解」とは、人間としてよりよく生きる指針を身につけること。「自己を見つめる」とは、人間としての自分らしい生き方をしっかりと考えること。「物事を多面的・多角的に考える」とは、道徳的な事象や状況に対して、どうとらえればよいのか、どうすればよいのかを多様に考えることです。この3つの要素を、指導の意図や児童生徒たちの実態、教材の特質などに応じて多様に組み合わせて指導することになります。そのことを通して「人間としての自分らしい生き方についての考えを深め」「道徳的判断力、心情、実践態度と意欲を育てる」のです。

**道徳的判断力**とは、善悪の判断であることは当然なのですが、今日、善ではないが悪でもないという事象が多く見受けられます。そこで大切なのが「人間としてどうすることが求められるのか」という基準から判断する力です。**道徳的心情**は、「人間として望まれる事象や状況」に喜びの感情をもち、「人間として望ましくない事象や状況」に不快の感情をもつことと捉えられますが、さらに「不快な事象や状況に対してよくしたい」という感情も含めて捉える必要があります。**道徳的実践意欲・態度**は、「人間として望まれることを自分らしく実行しようとする構え」、逆に言えば「人間として望ましくないことはやめておこうとする自制心」ということになります。この道徳的実践意欲・態度は、「構え」や「自制心」で終わるのではなく、「具体的実践」「自制」へと進むようにすることが大切です。

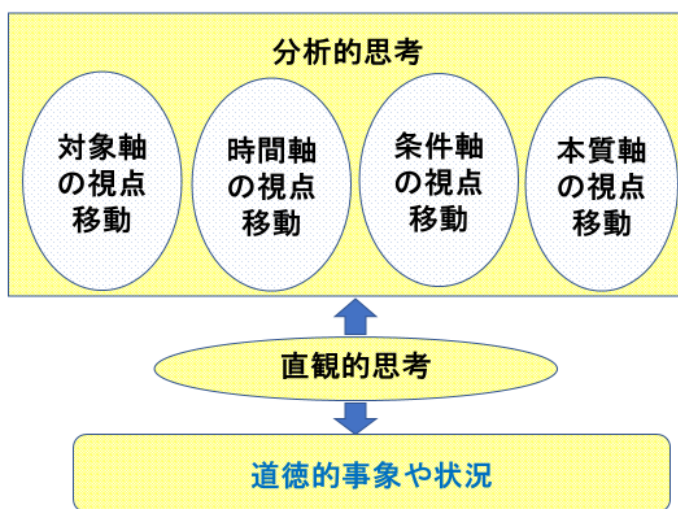
道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲・態度は、相互に関わり合いをもっています。そのことによって、日常生活や自分の人生に生きて働く道徳性が育まれるようにしていく必要があります。道徳教育の目標である、人間としての自分らしい生き方をしっかり考え、そのこ

とを日常生活や様々な学習活動で主体的に追い求め、自己を形成し、みんなと共によりよい社会を創っていきけるようにしていくのです。それが学校教育全体で取り組む道徳教育です。

## 2 「考え、対話し、自己の生き方を深める」授業の工夫

道徳の授業においては、「考え、対話し、自己の生き方を深める」授業が大切です。「考え、対話し、自己の生き方を深める」というのは、いろいろな意見を出し合い、話し合いを深めながら、課題に向き合い、自分自身との対話を深めていくという意味です。知識や技術を覚えるのではなく、じっくり考えて自分の意見をしっかりもって、みんなで話し合い、自分のこととして課題を追究していく授業を目指しています。

「考え、対話し、自己の生き方を深める」授業において、まず大切なのが**直感的思考**です。児童生徒たちが教材から感じること、気づいたことを大切にします。それが直感的思考です。道徳の授業では、道徳的な感性を大切にする必要があります。



次に、そのことにかかわって、どう思考を深めていくかです。いわゆる分析的思考になります。その思考の方法（スキル）を児童生徒たちが身に付ければ、いろいろな道徳的事象や状況を考えたり、直面したりしたときに応用できます。そのような道徳的な見方・考え方のスキルの基本として、思考の視点移動が考えられます。大きくは、対象軸、時間軸、条件軸、本質軸の視点移動です。

**対象軸の視点移動**とは、相手の立場に立って考える、第三者の立場で考える、自分の立場で考える等、同じ空間における対象を移動させてその立場に立って考える方法です。例えば、

「あなたが〇〇さんだったらどう思う」というように問いかけます。人間の特性として自己防衛本能も働き、自分中心で考えてしまいます。それでは、道徳は成り立ちません。相手の立場に立って考えられようになることは、道徳的思考の基本となります。

**時間軸の視点移動**とは、以前のことを考える、これからのことを考える等の方法です。例えば、「以前はどうだっただろうか」「このようにするとこれからどうなるだろう」というように問いかけます。これも人間の特性として、目の前にある状況の中でのみ、考えてしまいます。思考を深めるには、前のことや、この結果はどうかとか、将来を考えるとどうか、といった視点からの思考が必要です。

**条件軸の視点移動**とは、道徳的な事象や状況に対して、条件や状況を変えて考える、仮説的に考える、比較して考える等の方法です。例えば、「このようにすればどうなるだろう」「もしこのように考えればどうか」「前と比べてどうか」というように問いかけます。条件軸の視点移動は、いろんな学習で使われますが、道徳的思考においては、道徳的事象や状況を多様にとらえたり、どうすればよいかを考えたりするときに重要になります。

**本質軸の視点移動**とは、本質にかかわって問いかけを深めていく方法です。出てきた意見に対して、「それはどうして」「それはどういうこと」などと問いかけます。出てきた意見に対して次々と「どうして」「どういうこと」と問いかけるその問自体が視点移動となり、本質へと迫っていきます。道徳的思考であれば、生きるとはどういうことか、よりよく生きるとはどういうことかといったことや、授業のねらいそのものにかかわる思考を深めることとなります。

これらは、どの授業においても使うことができますが、授業のねらいや教材の特質、児童生徒たちの実態、授業の展開などを考慮して選択していく必要があります。例えば、いじめを取り上げた授業でも、どうすればよいのかを中心に考えたいと思えば、条件軸の視点移動を中心に発問を考えてみる。どうしてこうなるのかを中心に授業をしてみたいと思えば本質軸の視点移動を中心に発問を考える。相手の苦しみをしっかり考えられる授業にしたいと思えば、対象軸の視点移動を中心に発問を考える。生涯にわたって仲良く生きられるようにしたいと思えば、時間軸の視点移動を中心に発問を考える、といった風にです。もちろん、中心をどこにおくかであって、実際の授業では、複数の視点移動が絡み合ってきます。

道徳の授業は、児童生徒たちがこのような視点移動の技術を身につける訓練の場でもあります。そして、児童生徒たち一人一人が、そのスキルを日常生活や様々な学習活動で生かしていけるようにすることが大切です。場と時に応じて、このような思考が多様に使いこなせるよう

に働きかけていくことが、全教育活動における道徳教育であると捉えることもできます。

### 3 教材研究、学習指導案づくりのポイント

道徳の授業は、教材を媒介にして、教師と児童生徒、児童生徒同士の心の交流を図ることが基本です。児童生徒が教材から感じるのと同時に、教師自身が教材から何を感じるかを押さえておくことが重要です。心の動きを共有することで深まりのある授業になっていきます。

心の動きを共有する学習指導案のポイントとして、次のようなことが挙げられます。

- ① 教師自身が心を動かされる場所はどこかを探します。
- ② なぜ心を動かされたのかを考えます。
- ③ その理由には道徳的価値が関わっているはずですが、その道徳的価値を軸として、児童生徒とどのようなことを話し合いたいかをメモします。
- ④ 考えたいこと、確認したいこと、伝えたいことを、児童生徒たちの心の動きや発言を予想して整理し、展開を考えます。
- ⑤ 児童生徒たち自身が自らへの問いを深められる発問を工夫します。
- ⑥ 課題意識を持たせて、授業後の学びへとつなげられるようにします。

### 4 板書計画と道徳ノートの工夫

授業を具体的に考える上で大切なのが**板書計画**です。道徳の授業においては、思考を促すための板書が不可欠です。学習指導案に板書計画を付けることによって、授業の具体が見えてきます。特に難しい内容の教材であれば、状況がうまく理解できるように、最初に簡単に内容を図式化したりします。また、対象軸の視点移動を重視する授業であれば、人物絵や写真などの教具を用意し、適切な場所に張っていきます。時間軸の視点移動を重視する授業であれば、過去、現在、未来について話し合えるように分けて示します。条件軸の視点移動を重視する授業であれば、道徳的事象や状況を理解できる簡略な図を示し、条件軸の視点移動による話し合いができるようにスペースを取ります。本質軸の視点移動を重視する授業であれば、ねらいやテーマのキーワードを示して、発問を繰り返すことで話し合いを深めていけるように板書を工夫します。

そして、それらの意見を整理した後で、自分に問いかける発問を板書し、出てきた意見をいくつか板書し、事後の学びへと意識をつなげていきます。

このような板書は、授業後も思考を深めることに役立ちます。写真に撮ったり、簡単に板書をメモしたものを複写し、児童生徒たちの道徳ノートに張れるようにし、家でさらに考えたことを、その下に書くようにしていくことも多面的・多角的思考を深めることとなります。

なお、板書は、授業後写真に撮ったり、メモをして児童生徒に渡して道徳ノートに貼るようにすると、記憶に残っていきます。また、教材と拡大した板書の写真を教室に貼っておき、授業後の関心を持たせることで日常生活とかかわらせて捉えてくれるようになります。

また、**道徳ノート**は、大変重要です。例えば、事前の学習のスペースを取る、授業で自由にメモできる頁を1頁取る、中心発問に関する記述のスペースを取る、自分とのかかわりで記述するスペースを取る、今日の授業の自己評価項目を示し評価ができるようにする、事後の学習を記述するスペースを取るといった工夫が考えられます。

## 5 多様な道徳授業の工夫

これからの道徳の授業で、特に求められているのが「自我関与を重視した授業」「問題解決を重視した授業」「体験的な学習を重視した授業」、それに「総合単元的な授業」です。

「**自我関与を重視した授業**」とは、自分を深く関わらせて授業をするということです。道徳授業の基本といえます。先ほど示しました心の動きを重視した学習指導案のポイントがそのまま生かされます。

- ① まず、教材が示す道徳的な状況や道徳的事象に対する児童生徒の心の動きを押さえます。
- ② そして、どうしてそのように感じるのかを問いかけていきます。そのことを踏まえて道徳的な状況や道徳的事象に対して多様に考えられるようにします。それらを整理しながら道徳的価値意識を深めていきます。
- ③ そして、その視点から自己を見つめ自己課題を意識できるようにします。
- ④ さらに事後につなげていけるように働きかけを工夫します。

「**問題解決を重視した授業**」とは、道徳的な問題や課題に対して積極的にかかわり解決していける力を育てる授業のことです。問題を解決する力を育てるためには、本質知（どうしてこのようなことが起こるのか）に関する学びと、方法知（どうすればよいのか）に関する学びが必要です。

- ① 実際の授業では、まず教材の中の出来事に対して「どうすればよいのかを考えよう」を学習課題にします。この問いかけに「どうしてそうなったのか」という本質知にかかわる問

いかけも絡ませながら進めます。

- ② 次に、教材に描かれている出来事を自分に置き換えて「どうすればよいか」「どう生きればよいか」を深く考えるようにします。

このような授業の進め方は、時間がかかるので、2時間続きにしたり、1時間を道徳の授業で進め、後の1時間を学級活動の中で進めるといった方法もあります。さらに、「総合的な学習の時間」と連携させると、児童生徒が主体的に道徳的課題を探究する授業にすることができま

す。  
「**体験的な学習を重視した授業**」とは、体験をすることで道徳的価値意識を深く考え、実感したりする授業です。学んだことを日常生活でも実践できるようになることを目指しています。

- ① 実際の授業では、役割演技をしたり、観察したり、調べてきたりして、課題を見つけることも行います。
- ② 実物に触れる、本人に出会う、疑似体験する、実際場で考え感じ取る、実際にやってみてその行為の意味を考え、また行為の仕方を考えるといったことも行われます。
- ③ 具体的実践を事後に取り組み実感することで日常生活とつなげたり、授業の中で今までの体験を「そういうことだったんだ」と逆に実感してつなげていくこともできます。

「**自我関与を重視した授業**」「**問題解決を重視した授業**」「**体験的な学習を重視した授業**」は、他の教育活動や日常生活、さらには家庭や地域にもかかわりを持たせて総合単元的に指導することも重要です。

「**総合単元的な指導**」とは、様々な道徳的課題に対して、「特別の教科道徳」を要として、関連する教育活動と密接にかかわらせた指導を計画的に行うことです。道徳的課題を総合単元として位置づけ、1～2ヶ月間に亘って計画的に学べるようにします。

- ① 総合単元的道徳学習の計画全体を通して、どのようなことを指導するのかについてそのポイントを3～5つくらい書いておきます。
- ② ねらいにかかわる気づきや考え、興味や関心等が連続的に発展するように、各教育活動の特質や学習内容を考慮して、調べる学習、深く考える学習、道徳的価値の自覚を深める学習、実感する学習、表現する学習、体験する学習、実践する学習などを組み合わせ、響き合わせていきます。朝の会や帰りの会、掲示、家庭や地域での学びなども工夫します。
- ③ 児童生徒たちの意識の連続性を考え「特別の教科 道徳」が要の役割を果たせるようにします。「児童生徒の心の動き」という欄を設けて、総合単元のねらいに関して意識が深め

られたり広げられたりするように計画をしていきます。

- ④ 児童生徒と一緒に道徳学習を深めていくことが重要です。児童生徒も、計画レベルから参画できるようにします。家庭にも働きかけることで、学校、家庭、地域が連携した道徳教育を具体化することができます。
- ⑤ 総合単元的道徳学習用のノートを創り自分の宝物を創るという意識をもてるようにします。

## 6 「特別の教科の道徳」の評価の特徴と具体化

「特別の教科 道徳」の評価は、従来の評価観を 180 度転換するものです。これまでは主に、教えたことをどの程度理解し身につけたかを見るものでしたが、「特別の教科道徳」では主に、児童生徒が本来持っているよりよく生きようとする心をいかに目覚めさせ、引き出したかを見ていきます。これは教育の本質とかわります。具体的には、点数評価は行わず、「個人内評価で学習の状況や道徳性において成長したところを文章で示し、児童生徒たちを勇気づける評価」をします。「特別の教科 道徳」の評価は、児童生徒自身が的確に自己評価をし、自己課題を見出し自己指導へとつなげていくことが大切です

「特別の教科道徳」の評価について、例えば次のような取組ができます。

- ① まず授業のねらいに関わる一人一人の実態把握を行います。そこから指導課題を見だし、その視点からよさを見つけられるようにします。その子のよさを見いだす独自の視点も見いだしたいです
- ② 授業では、一人一人の発言からねらいにかかわるよさを引き出せるように授業を展開していきます。意図的指名なども行い、実態把握や課題としてメモしていたことをうまくかわらせて問いかけていきます
- ③ さらに、授業で記述するノートやワークシート、児童生徒の自己評価を工夫する必要があります。今日の授業で気づいたこと、新しく発見したこと、確認できたこと、納得できたこと、さらに今日の授業の自分の態度などについても書けるようにします
- ④ それらをもとに、今日の授業で見出したねらいにかかわる一人一人のよさをメモしてみます。そして、さらにどのように授業を展開すればよさを引き出せるかを考えます。授業ごとに、数人を重点的にメモすることでもいいです
- ⑤ メモしたものを、学年で検討することも大切です。時には交換授業を行い、一人一人のよさの記述を検討することも求められます。

- ⑥ そして、学期の終わりに、その期に行った道徳の授業をリストアップして心に残っている授業を3つくらい挙げてもらい理由も書いてもらいます。またこの学期で伸びたと思うことも書いてもらいます。
- ⑦ それらをもとに、座席表などへのメモも含めて自分が書いている記録と照らし合わせて、一人一人の伸びたところを書き出し、通知表に記述します。
- ⑧ 学期の全体を通して伸びたところとそれに関わる具体的な授業の様子について記述ができるとよいです。基本的には日々の先生の言葉がけやコメントが全体の評価に結びついていきます。

このような評価を行うには、児童生徒一人一人のよりよく生きようとする心を信じて、愛情と興味をもって接することが大切です。児童生徒と心を通わせ、じっくり語り合い、聞き合うこと。気になった児童生徒がいたら、授業後に個別に対話をする。そうすると自然と心が通じていきます。道徳の授業を要として児童生徒の成長と、学級の成長、そして教師自身の成長を同時に考えていくことが大切です。